



経営学部長 青木章通 教授

背景の建物は生田キャンパスの総合体育館

あおき あきみち

1969年東京生まれ。1992年早稲田大学商学部卒業、1996年専修大学経営学研究科修士課程修了、2000年慶應義塾大学商学研究科博士後期課程単位取得退学。担当科目は原価計算、工業簿記、新領域科目（働き方の選択）など。主著として、『ケース管理会計』（共著、中央経済社、2017年）、『企業グループの管理会計』（共著、中央経済社、2017年）、『管理会計』（共著、新世社、2008年）、等。

私の研究領域と 今の学生について思うこと

令和4年9月1日に本学の経営学部長に着任いたしました。私の任期は、コロナ禍の混乱期からコロナ前の状態にどのように戻していくか、そしてコロナ禍の間に大学に起こった新しい変化（オンライン授業など）をどのように良い形で定着させるかを考える期間になるでしょう。育友会の皆様にも是非とも強力なご支援をお願いしたいのですが、そのためにも私のことを知っていただけたらと思い、専修大学との縁や研究のこと、今の学生に対して感じていることを文章にまとめてみました。

専修大学との縁

私は大学院（修士課程）の2年間を専修大学の生田校舎で学びました。大学を卒業して2年後の入学でした。1994年から1996年までですので、もう30年近く前になります。指導教授は、経営学部名誉

教授の櫻井通晴先生です。それまで、私にとっての勉強とは、受験勉強であり、資格取得のための勉強でした（これも一種の受験勉強ですね）。私は、専修大学で学問として会計学を学ぶことの楽しさ、そして厳しさを知りました。

櫻井先生の大学院の授業はスーツ着用が義務で、毎週、企業からも勉強のために数人の方が出席されていました。就職してからも学び続ける必要があるのだということも、当時の私には大きな驚きでした。大学院の同期も先輩もみんな賢くて、発言するのにも勇気が必要だったことを思い出します。その後、博士課程は他大学に進学しましたが、他大学の教員を経て34歳のときに縁あって専修大学に戻って教鞭をとることになりました。同じ門下で学んだ先輩や後輩が私の他に3人も専修大学で教員をしているのは大変心強いことです。

櫻井先生の研究室は、私の研究室の斜め前にありました。研究室に続く廊下を歩いていると、30年前の大学院生だったころをしばしば思い出します。苦しくて、忙しくて、充実していたあの頃を。専修大学で過ごした2年間で学んだことの1つは、一生懸命頑張れば、何を始めるにも遅すぎることはないということです。

私の研究領域

私の専門は管理会計という分野です。管理会計は経営のための会計であり、多くの方が「会計」と聞いたときにイメージする簿記や財務諸表とは少し違います。管理会計で取り扱う問題は、会計の情報を組織や人の評価のために利用することや（チェーン店の店舗別の業績評価などはその典型です）、新しい商品の発売といった意思決定のために会計の情報を利用することです。そのため、経営学やマーケティングとも関係の深い学際的な領域です。経営学部の学生のなかには会計に大の苦手意識を持っている方もいるのですが、管理会計は予算や商品開発など組織の様々な業務で利用されるので、体系的に勉強しておいて損のない領域だと思っています。

私は管理会計のなかでも、レベニューマネジメントやサブスクリプションといった商品の価格に関わる領域を中心に研究してきました。レベニューマネジメント（最近では、ダイナミック・プライシングとも呼ばれています）とは、限られた数の商品をどの顧客に売らなければならないかを分析したり、必要に応じて商品の価格を変動させたりすることで、売上そして利益の最大化を実現する経営手法です。値付けを経験と勘と度胸（頭文字をとってKKD）に頼るのではなく、科学的に分析を行って実行することが大事です。事例は、ホテルや交通機関などでよく見られますが、今ではプロスポーツ、外食、音楽業界（ライブのチケット）、ネットスーパーなど様々な領域で導入が進んでいます。

一方で、最近注目を集めているのが、サブスクリプションという仕組みです。サブスクというと価格は定額で使い放題というイメージがありますが、実際には様々な料金体系を組み合わせて利益を生み出しています。IT企業を中心にサブスクを導入している企業は急激に増加していますが、日本ではその仕

組みについて十分に研究が進んでいません。そこで、この分野の研究を進めるとともに、今年度からサブスクリプション・ビジネスを深く理解するための授業を始めました。多くの学生さんが興味をもって受講してくれています。

最近の学生について思うこと

最近の学生さんは、10年前と比べても格段に忙しくなりました。コロナの落ち着きと共に、アルバイトやインターンシップ、学内外のイベントに積極的に参加する学生も増えました。いわゆるガクチカ（学生時代に力を入れたこと）として話せる経験を積み、少しでも成長しようと努力しています。就職活動の早期化が、学生の忙しさに拍車をかけています。

一方で、やるべきこと、情報量が多すぎるせいで、一つのことについてじっくり取り組む時間が不足しているようにも感じます。情報量が増えて、一方で忙しくて考える時間が減っているのですから（青木家の息子を観察する限りですと、動画の視聴のせいで時間が足りないのではとも思える）、どうしても理解が表面的になるのは必然ですよね。テーマは何でも良いので、試行錯誤する時間を確保できると、より成長できるのにと感じるが増えました。

育友会への感謝

私の息子も大学生となり、大学生の子供を抱える親の気持ちが実感として理解できるようになりました。ご息子・ご息女が大学生になるまでに、皆様がどれほどの愛情を注がれてきたのかを思うと頭が下がります。大学生になっても、良き友人に恵まれて大学生活を楽しんでいるのか、ご心配は尽きないことでしょうか。子供は親離れしていても、親はいつまでも心配してしまいますよね。

高校と違い、大学では毎日、一人一人の学生さんの生活指導を行うことはしていません。しかし、初年次の入門ゼミナールを通じてクラス担任の先生は決まっていますし、私たちも可能な限り、コミュニケーションを密にとれればと考えています。そのなかで、育友会という組織が果たす役割は非常に大きいのです。育友会への日頃の貢献に、心より感謝申し上げます。